

日本語要配慮生徒の進路指導を支える体制

—進路指導主事に対する意識調査から—

浜田 麻里 (京都教育大学)

1. 研究の目的

本稿では、多言語環境で育ち学習言語を含む日本語の使用で困難に直面している生徒を「日本語要配慮生徒」と呼ぶ。日本語要配慮生徒にとって、高校進学が大きなハードルである(鈴木 2011 他)等、進路選択の課題は大きい。

学校教育法施行規則第七十一条には中学校の進路指導主事について「中学校には、進路指導主事を置くものとする。(中略)生徒の職業選択の指導その他の進路の指導に関する事項をつかさどり、当該事項について連絡調整及び指導、助言に当たる。」とされており担任教員同様、進路指導に大きな役割を果たすが、対象にした調査はほとんどない。

本稿では進路指導主事の意識を明らかにし、日本語要配慮生徒の進路指導を支える体制づくりに示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

A 市進路指導研究会の許可と協力を得て、全A 市立中学校(73校)の進路指導主事を対象としたアンケート調査を実施した。調査は筆者が講師を務める同研究会の平成27年度第1回研修会(8月)と第2回研修会(10月)の間に実施された。

調査票の送付と回収には同研究会を通じた電子メールを利用した。調査票の発信・返信元を同研究会に依頼し、回収された調査票をまとめて筆者に送付してもらうことで、筆者には回答者の匿名性が保たれるようにした。最終的に43件の回答を得た(回収率58.9%)。

3. 結果

回答者の半数(21名)は勤務校に日本語要配

慮生徒が在籍せず、外国人や日本語指導に関する研修の受講経験者は16名(37.2%)に止まる。日本語要配慮生徒の進路を保障するための方策として「地域のNPOやボランティアとの協働」が必要と考えられているが、大半(27名、62.8%)は「どのような団体や活動があるのか具体的には知らない」。もし突然日本語要配慮生徒が編入してきり、十分な情報のないまま進路指導に携わらなければならない現状があることがわかる。

日本語要配慮生徒の進路指導で感じる課題について多肢選択(複数回答可)で尋ねた結果を次頁表1に示す。生徒や保護者の日本語能力や日本の制度の理解に関する課題が上位①～④を占め、キャリア教育に必要とされる「人間関係形成能力(項目⑫)」や「キャリアプランニング能力(項目⑬)」等についてはほとんど課題とは見なされていない。

4. 考察

進路指導主事が日本語要配慮生徒の指導に関して課題と感じるのは日本語や日本社会に関する知識等、他の生徒と比較して「欠けている」部分である。一方、例えばフィリピン系の生徒等は、勤労に向かわせる圧力が大きい、欧米への移住を視野に入れているなど(徳永 2008、高畑 2011、三浦 2014 等)、日本人生徒や従来多数を占めてきた中国系の生徒とは異なるキャリアイメージを有している可能性がある。進路指導主事が「日本語要配慮生徒の進路に関する教員側の情報が十分でない」と言うとき、それはあくまでも日本での高校進学という「教育的達成」を前提としたものに止まっているが、その点については課題として十分な意識化がなされていない。

キャリア観の違いは双方が意識化することが難しく、それが保護者や生徒との進路指導に関わるコミュニケーションの妨げとなる可能性もある。今後より多様化する日本語要配慮生徒の進路指導を支えるためには、キャリア観の違いまでを橋渡しできる多言語支援体制や、進路指導主事自身が多様なキャリアに対応できる柔軟なキャリア教育観を身につけられるような研修体制を整備する必要がある。

【引用文献】

鈴木江理子 (2011) 「政策」対象としての外国ルーツの子どもたち—何が「問題」なのか?」『解放教育』解放教育研究所、527号、pp. 26-33.

高畑幸 (2011) 「在日フィリピン人の1.5世代—教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放教育』解放教育研究所、527号、pp.54-63.
徳永智子 (2008) 「「フィリピン系ニューカマー」生徒の進路意識と将来展望—「重要な他者」と「来日経緯」に着目して—」『異文化間教育』異文化間教育学会、28号、pp. 87-99.
三浦綾希子 (2014) 「二つの「ホーム」の間で—ニューカマー1.5世の帰属意識の変容と将来展望—」『異文化間教育』異文化間教育学会、40号、pp.18-33.

付記
アンケート調査にご協力くださったA市進路指導研究会の皆様にご挨拶申し上げます。

表1 日本語要配慮生徒の進路指導で感じる課題 (多肢選択。複数回答可)

	全体 (N=43)	在籍なし (N=21)	在籍あり (N=22)	研修なし (N=27)	研修あり (N=16)
①授業に参加するための日本語力を身につけることが難しい。	28 (65.1)	11 (52.4)	16 (72.7)	17 (63.0)	11 (68.8)
②保護者に日本の学校制度や入試制度について理解してもらるのが難しい。	27 (62.8)	13 (61.9)	14 (63.6)	19 (70.4)	8 (50.0)
③保護者と教員のコミュニケーションが難しい。	25 (58.1)	10 (47.6)	14 (63.6)	17 (63.0)	8 (50.0)
④日本の社会や職業に対する生徒本人の知識が十分でない。	20 (46.5)	7 (33.3)	13 (59.1)	14 (51.9)	6 (37.5)
⑤家庭の経済状況が厳しい。	18 (41.9)	6 (28.6)	11 (50.0)	11 (40.7)	7 (43.8)
⑥生徒の能力が現在の入試制度の中では正當に評価されにくい。	16 (37.2)	6 (28.6)	9 (40.9)	12 (44.4)	4 (25.0)
⑦思考力、判断力等の基盤となる学力が十分でない。	13 (30.2)	4 (19.0)	9 (40.9)	6 (22.2)	7 (43.8)
⑧生徒と教員のコミュニケーションが難しい。	12 (27.9)	5 (23.8)	7 (31.8)	9 (33.3)	3 (18.8)
⑨日本語要配慮生徒の進路に関する教員側の情報が十分でない。	12 (27.9)	5 (23.8)	7 (31.8)	10 (37.0)	2 (12.5)
⑩これから何年日本で過ごすかなど、家庭の将来設計が明確でない。	10 (23.3)	3 (14.3)	7 (31.8)	7 (25.9)	3 (18.8)
⑪職場体験等のキャリア教育に参加する際の日本語力が十分でない。	9 (20.9)	3 (14.3)	5 (22.7)	6 (22.2)	3 (18.8)
⑫周囲の生徒と人間関係を形成する、学級に溶け込む等ができていない。	9 (20.9)	5 (23.8)	3 (13.6)	6 (22.2)	3 (18.8)
⑬生徒にキャリアに関する展望を持たせることが難しい。	8 (18.6)	1 (4.8)	7 (31.8)	6 (22.2)	2 (12.5)
⑭自尊感情が低く、自己分析を将来像に結びつけることが難しい。	4 (9.3)	1 (4.8)	3 (13.6)	2 (7.4)	2 (12.5)